

平成 18 年秋（9～11 月）の世界の天候の特徴

東シベリアからアラスカ、中東からアジア、ヨーロッパ、オーストラリア中部・南部など東半球側で高温となった地域が多かった。ヨーロッパ北部、トルコから中央アジア、米国北東部と西部、南米東部で多雨となり、東アジア東部、インドネシア、オーストラリアで少雨となった（図 1 参照）。

今回のエルニーニョ現象に関連する可能性のある天候は、①インドネシアの少雨、②オーストラリアの少雨、③アフリカ東部の大雨災害（※ 1）である。これらの天候は、過去のエルニーニョ現象時にも発生しており（※ 2）、この秋の熱帯域の大気・海洋の状況に関連して発生したものと考えられる。

※ 1 アフリカ東部については気象通報データが十分入電していないため、3 か月降水量が平年より多かったかどうかは不明であるが、気象衛星データからこの地域での対流活動は平年より活発であったと見られ、世界気象機関（WMO）が 12 月 1 日に発表したエルニーニョ現象に関する速報でも今回のエルニーニョ現象の影響とされている。

※ 2 図 1 を図 2（過去のエルニーニョ現象発生時の統計的な特徴）と比較すると、インドネシアとオーストラリアの少雨傾向が一致している。中東から中央アジアの多雨傾向も一致しているが、中緯度の天候であるので、偏西風の変動等のエルニーニョ現象以外の要因も考えられる。

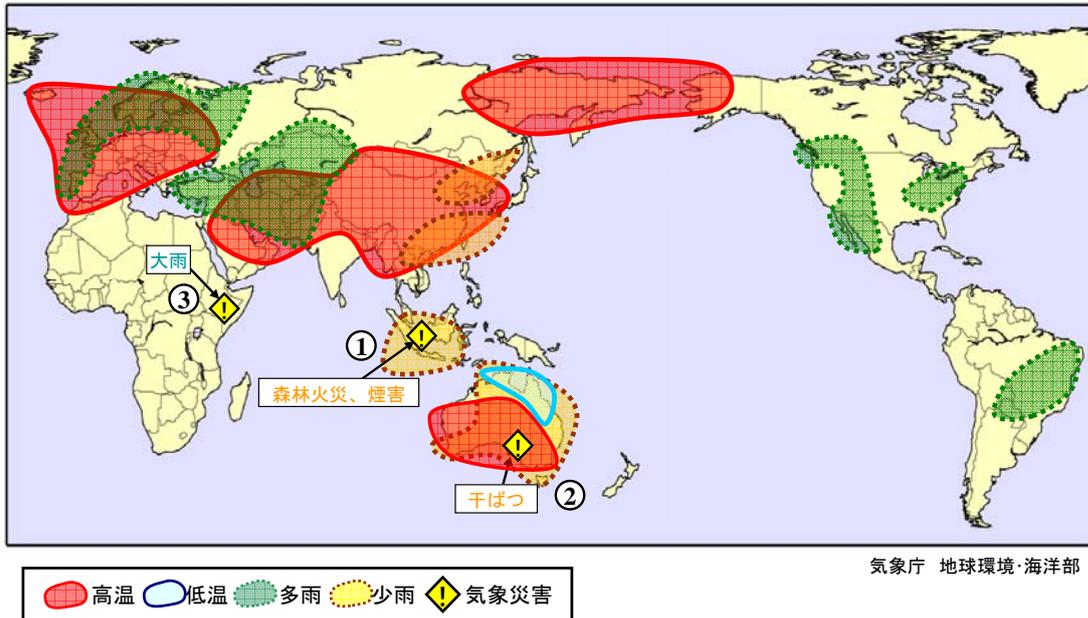


図1 平成18年秋（9～11月）の世界の天候の特徴

3か月平均気温・3か月降水量で高温・低温・多雨・少雨となった地域を示す。報道資料等で伝えられた主な気象災害についても記号で示す。丸数字はエルニーニョ現象に関連する可能性のある天候を示す。なお、高温・低温は10年に1回程度以下、多雨・少雨は3年に1回程度以下の現象が現れた主な領域を示す。

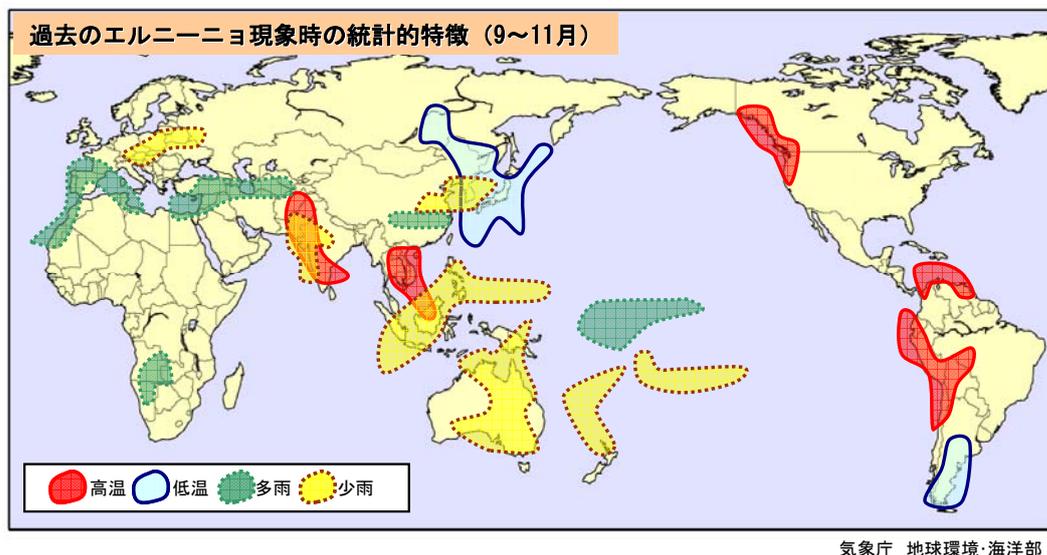


図2 エルニーニョ現象に伴う北半球の秋（9～11月）の天候の特徴

1949～2004年におけるエルニーニョ現象発生年とエルニーニョ現象・ラニーニャ現象ともに発生していない年とで比較し、統計的な検定の結果、危険率10%未満で有意な差のあった地域をまとめて分布図に示す。